

(別紙2)

審査結果の要旨

氏名 鈴木 泰

本論文は、古代日本語における時間表現のあり方を、従来の伝統的な文法研究とは異なって、「形態論的立場」によって記述しようとしたものである。

現代日本語の時間表現に関しては、伝統的立場の研究とは異なる教科研グループと呼ばれる人たちの形態論的研究があり、それはロシア語の完了体／不完了体の対立に相当する(と彼らが考える)「スル／シテイル」の形態対立をアスペクトと呼び、「スル／シタ」の対立をテンスと呼ぶものであって、現在かなり広く用いられている用語法であるが、古代語に関しては、ツ・ヌ・タリ・リ・キ・ケリのように時間に関わる(いわゆる)助動詞の数が多く、また相互に微妙な意味の差もあり、形態論的にテンス・アスペクトの二次元に収めて論ずることの困難さが直感されるので、教科研文法の枠組みで古代語を記述しようとする試みはこれまでにはなかった。鈴木氏の研究は、古代語においてもこの記述の枠組みが有効であることを実証しようとしたものである。

本論文は、アスペクトを完成相(ツ形・ヌ形)、不完成相(はだか形)、パーフェクト相(タリ形・リ形)の3種に分け、これと交差するテンスを過去形(キが付いた形)と非過去形(キが付かない形)に分けて、合計 $3 \times 2 = 6$ 種類の形態範疇を立てているが、パラダイムの立て方そのものとして、パーフェクトが完成相、不完成相と並列に並ぶアスペクト形態の一つとして位置づけられるべきものであるかどうか、十分に説得的ではないと思われる。また、個々の語形のパラダイムへの位置づけに関しても、第一に、キ形は継続的な意味を表さないのに(テキ形・ニキ形との対立という観点から)不完成相であるとする、第二に、ツ形・ヌ形は意味として発話時直前の過去を表すのに、(キが付いていないことをもって)完成相非過去形であるとする、第三に、はだか形(動詞終止形)の意味は多くの場合積極的に不完成的であると認めにくいにもかかわらず(ツ・ヌが付いていないことをもって)不完成相とする等々の諸点において、問題を多く見つけることができる。語形の名前(パラダイム中の位置)と意味の実態との間に乖離が見うけられるのである。本論文の魅力は数多くの用例を従来の水準を超えて精細に調査分析し、綿密に自己の主張を展開しているところにあるが、その結果これらの乖離のうちのいくつかを自らも注意深く指摘することに成功している。

古代語時間表現の形態をアスペクト(3種)×テンス(2種)の6象限に分けるという鈴木氏の論は、このように、事実の記述として十分に有効であるか否かについては議論の余地もあろう。しかしながら、現代語に関して教科研文法の「形態論的立場」によって時間表現を記述したことをよしとする立場に立つならば、それは当然古代語に関しても実現されなければならないことである。鈴木氏の本論文は、未だ誰も試みたことのないその難事業に果敢に挑戦したものであって、この領域の研究史に新たな一步を踏み出したものとして大いに評価されて然るべきものである。

よって、本委員会は当該論文が博士(文学)の学位にふさわしいものと判断する。